

「自己表現」のプログラム私案 『日本語表現』を教える事

塩田 公子

文学部文化情報メディア学科文化メディア専攻

(2004年9月18日)

A Self-Expression Program A Teaching Method of “*Nihongo Hyogen*”

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,
Major in Cultural Studies and Information,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

SHIODA Tomoko

(Received September 18 , 2004)

1

2004年度に岐阜女子大学は、教養のカリキュラムを大幅に変更した。改革の基本的な考え方は、大学で学ぶ為に必要な、基礎的な力を、きめ細かな学生対応と統一したプログラムのもとで養いたいという意図があったと個人的には考えている。なかでも「日本語」の能力、トータルに「読む」「書く」「聞く」「話す」という大切な表現力を高めるとともに、自己を正しく認識し、社会の中で位置づけ、自分の考えを持ち、自己主張が出来る力を養うことが主眼ではなかったかと思われる。

近年、学生の日本語の力が従来より不足していると、現場の教員達が認識しているようである。本学のみならず、全国的に多くの大学で「日本語表現」「日本語表現法」などと名の付く講義が開講されている。それは、おそらく、どの大学においても、学生の表現力、基礎的な日本語能力が低下したと考えている

からにちがいない。

たしかに、26年教壇に立ってきて、学生の日本語能力はこの10年ほどで年々低下してきた。私は日本古典を担当してきたが、現代文はまだしも、古文の理解などは惨憺たるものである。26年間定期テストの所要時間は1時間で変わっていないにも関わらず、古文の解釈問題の問題文の量たるや、今や5、6行出題しても、完璧な解答は得られない。26年前は問題文だけでB4の用紙に1、2枚あったものである。

それに加えて最近の悩みは、講義で対象とする文学作品や、講義でとりあげる文章素材を、学生が本当に理解してくれているのか、あるいは、理解していてもその理解の度合いがこちらの要求に応じた程度に達しているのかが見えにくいことである。要するに「わかった！！」と言っているけれど、「どの程度わかったか？」の中身をはかることが出来ないことが問題なのである。

今年度の「21世紀の教育を考える会」では、

「評価」という観点が今もっとも話題であって、それに関する発表も行われた。

中等教育の現場にいる教師達は今、教育の対象とする生徒達を、とりあえず5段階なり、3段階なり、生徒の理解の度合いを「評価」しなければいけない現状にある。教師が正当に生徒を評価し、また生徒側がその評価を真摯に正確に受け止め、次なるステップへと進む良き指針にならなければならない。そのように評価するということがほぼ毎時間必要とされると言うことだろうか。(はたしてそのようなことが可能なか私には疑問であるが。)

私には評価すること自体が、言い換えれば、その時その時の学習の過程ですでに、各生徒のもつ能力や理解の度合いやを判定して差別化することに異ならないのではないかと思えてしまう。要は、生徒(大学では学生)個人が、過程はさておき、最終的には自分の力で目標の到達点まで行けば良いわけではないか、と私などは思うが、そういう、きわめてアバウトな牧歌的な教育の成果をいまだに望んでいるようでは、現在の教育状況からは取り残されているのかもしれない。

しかし、そこは、中等教育とは目的を異にする大学教育現場である。

とくに私は、日本語の表現を基礎とした、文学を教えようとする教師である。少なくとも素材である文学作品や言語を媒体とした素材を学ぶことを通して基本的な言語知識、言語に対する感性を身に付け、「自分の頭で考えて生きていく」為の血と肉とし、言語文化から得られる知的な感動に歓びと幸せを感じることができる学生を育てることが自分が教壇に立つことの究極の目的であると考えている。

そこで、問題は、このような目的達成のためにも、学生の理解の程度はどうしたら“見

える”のか?ということである。

学生の理解の度合いを、教師が学生を見ようとするので、事がややこしくなるのだと、私は考える。

学生一人一人が、自分で自分の評価をすればよいのである。

教師が評価できるのは、「点数」「数量」など「目で見えるもの」に関わる評価だけである。例を挙げると、全員に同じ時間を与え、同じ問題等を解かせて、一定の時間で切り上げたときの進捗具合、到達点のようなものが、現在「評価」といわれているように思われる。個人差が時間に現れ、それも理解の程度ともいえるかもしれないが、時間の長短に関わらず、自分の力で最後まで出来ればそれはそれで評価されるべきである。

とりあえず、5, 4, 3, 2, 1といった数字で評価基準が設定できるものはよしとし、美術、スポーツ、音楽のような科目はどうなるのだろう。明確な基準が設定しにくく、最終的には教師の感性にゆだねられるのではあるまいか。たまたまその教師から良い評価をもらった生徒はその教師と共鳴できたにすぎないのではないだろうか。

たとえば、子ども達が、砂場で、砂遊びをするときの生き活きとした表情が、教室の美術の時間にみられるだろうか、子どもながらに教師の評価を気にするはずである。だから、緊張し、堅くなり、スタンダードな評価に見合う作品を作ろうとみんな必死だ。

大学の教壇においてまで、そのように教師がスタンダードな物差しで学生を評価し、教師から「下し置かれる」評価はしたくない、なぜなら、大学の教育現場までも学生を他者との相対評価の中で序列化、差別化していったら、もう後がないという気持ちが私には常にある。せめて大学教育の中で、偏差値教育の弊害(これこそ無明の闇)から自力ではい

出る力をつけなければ、後が無いのである。

しかし、大学の講義の時間は、半期で12～15回、最近ではほとんどの講義が半期単位になり、のんびりしてられない気ぜわしさに常につきまともわれている。

教師は講義のなかで、学生に伝達し教えるべき事で精一杯で、なかなか個々の学生の理解を補助することが時間的に困難である。

そんな、思いを助けるために、Campus Partnerを作った経緯もある。(Campus Partnerは商標であるので、以下本文中では「システム」と表記する)

このシステムの目的の一つは、90分の講義時間のみでなく、家に帰ってから、学生に質問、意見を述べる場を与えるためである。講義時間のみで100パーセント理解できる学生ばかりでは無いし、家に帰ってまでとけない疑問がしこりとなって残っている場合がないとはいえない。

「システム」はそのような時に利用できるようになっていく。

先に、大切なことは、教師がその学生を評価するのではなく、学生が自分の理解を評価し、認め、次の目標を定め、努力をすることだと、私の考えを述べた。

つまり、学生自身がこの理解のためのプロセスを繰り返すことができるような「日本語教育」のプログラムを考えて実行することが教師としての仕事だと考える。

私は教育学を学んだわけでもない、教育学の専門的知識も無ければ、教育界に身を置いて研鑽を積んだわけでもない。あくまでも、文学を教えてきた過去の年月から感じてきたことを述べているのであることを断っておく。

本来、教育とは、教育する理想や、目的や、理論や、テクニックが、学問研究の成果と正しく結びついていることが大前提であるにも

かかわらず、教育と研究が分業のまま戦後の教育が続いて来たのではないか。そのツケを今、教育者も、研究者も払わされていると思えば、多少の苦労は責務でもある。

私は大学の教壇に、そういう自覚で立っているだけである。人間が学ばねばならないことはたくさんある、そして、どの領域にも同じ程度の理解ができることなどあり得ない。

教師としての私は、自分をもっともすばらしい学問研究分野は文学であると信じているから、それを学生に教え、文学を学ぶことで未来が開け「幸せ」をつかめるのだと、独善的に押しつけるしかないと考えるのである。

そんな訳で、「文学」のすばらしさを理解する以前に、言葉の壁、基礎的な知識のなさ、(つまりは日本語を理解できない赤子のような状態のママ)で、貴重な時間を無駄にして欲しくない、と、とりあえず学生の理解の度合いが見える方法を模索する必要があったのである。

2

この2年にわたり、「日本語表現の基礎」という科目で、学生の理解の度合いを知る一つの手段として、教材を音声資料である「落語」に求めてきたのも、黙読、あるいは、教師の模範読みで作品を扱うことの危険さに気づき始めたからである。書かれた作品とちがいで、「落語」の録音やビデオは聴衆の笑いを伴っている。同じ「日本語」をつかう「日本人」が愉快そうに笑うのである。その他者の笑いを尺度として、自分がどの程度の理解の深さに有るかを自己認識することが出来ると考えたのである。同時に自分の周りの受講生の笑いも、自分の理解を相対化することに役に立つはずである。

評価とは、一人一人の学生が、自分自身が納得できる到達点に到達できたかどうかであ

ると考える。あくまでも自分の心の問題である。自分の弱さと戦い勝ち抜くことが評価であり、決して他者と比較することが評価ではないと自分自身で気づかなければ、教育の成果など無いに等しいと考えている。

一昨年、始めて学生達に落語を聞かせたとき、私は心底ビックリした。私が聞いた中でも最も楽しく最も面白く、作品としての構造も良くできていると感じている、小佐田定雄作『茶漬け閻魔』を聞かせた。おそらく子どもの時に、かならず読んだに違いないと私が考えていた、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』のパロディになっており、その「落ち」の面白さに笑うはずである……と考えていた私が間違っていた。9割以上の学生が、にこりともしなかったのである。そこには二つの問題があると思う。

一つは、人々が笑う理由を本当に理解できないから笑えないということ。もう一つは、授業という空間が、感動したり、笑ったり、涙したりすることを長い間奪い続けて来たと言うことである。

笑いたいときに遠慮して笑えないことも悲劇であるが、知識や教養が無くて、人々の笑いについていけないことはそれを上回る悲劇である。

そのような私の気持ちを支えてくれる、次のような私の気持ちを支えてくれる、次のような文を、すこし長い引用する。

われわれは日常よく、「あの人は頭が良い」とか「悪い」とか無責任に話し合う。が、「頭が良い」とは一体何を基準に言うのかは議論が別れるところだ。そもそも脳には記憶力、判断力、想像力等々、数多くの働きがあるが、その全てにすぐれている人など、滅多にいるものではない。学校でも、たとえば、数学の先生は数学の出来る生徒を頭がよい子だと思いい、英語の先生は英語が得意の子を優秀だと

考えがちである。が、喜劇の好きな人は間違いなく頭の良い方である。ユーモアを解するのは高度に発達した人類だけに許された行為だからだ。

(中略)人間と動物の違いはまさにここにあるのであって、つまり動物は記憶力や判断力は持ち合わせているものの、ユーモアを解する能力はない。犬などでも、人間の言葉をかなり理解するのがいるが、駄洒落をいったら、面白がって尻尾を振ったなどという話は聞いたことがない。従って、いくら一流の大学を優秀な成績で卒業しても、落語や冗談が通じない、喜劇を見ても笑わないといった人間は頭が良いとは言えない。(『喜劇が好きなあなたへ』向井爽也著 演劇出版社 1996年12月)

このような意見に勇気づけられて、その後も事あるたびに、あえて「落語」という素材を教材に取り入れている。なによりも笑いは人を幸せにする、学生達が講義中に笑い顔を見せるのを見ることが出来るのは、教師として理屈抜きで幸せな気分になるというものである。そして、「落語」は教師にとって、もっとも学生の理解の度合いを測る良い基準となり、なによりも今まで強調してきた、自分で自分の理解の度合いを本人が認識できる利点は何にも代え難い。落語の資料は、実際の高座の実況録音であるから、面白いと遠慮無く笑う聴衆の心の動きが手に取るようにわかり、話の理解をしめす基準が明瞭にあるからである。自分たちと同じ「日本人」が聞いて笑っているのに、笑えない自分に気づき、自分で笑えるように努力する以外、自分の心の弱さから脱却する方法はないからである。

り口において、最も必要なことは、学生が自分自身を正当に自己批判し、生きていく為に自分が必要と思う知識や、力を自分の基準で身に付け、過去の豊かな文化にふれ、豊かな表現力を身につける事である。以下6つの眼目でその為のプログラムを作成した。

「自己表現」講義プログラムの眼目

- 1 従来の講義形式以上の効果を生み出すための情報機器と「システム」の利用。
- 2 講義時間以外のサポート体制による教育効果の向上。
- 3 「自己主張」の大切さに気づかせ、大いに「自己主張」が出来るようにする。
- 4 他者と違いを知り(「聞く」、「読む」行為を通じて)自己を相対化することが出来るようにする。
- 5 表現する内容を、より豊かに、より知的に、より効果的にすることが大切であることを学びその技術や方法を学ぶ。
- 6 歴史に支えられた「日本語表現」とそれによる「日本語文化」の豊かさに感動できる心を養い、未来に伝えていく創造力を養うことが大切であることを学ぶ。

以上の点を、この「自己表現」という講義の目標とし、以下にその具体的な考えと、方法と、実践の結果を示すこととする。

(1) 「システムの利用」

高度に情報化されていく社会で有意義に生きて行くためには、今後、今以上に情報機器を使いこなす事が必要とされる。「システム」はそれを見越して、学生一人一人がウェブ上に「個人ページ」をもち、個人の情報管理や、他者とのコミュニケーションが出来、「講義ページ」には、講義に関して必要だと考えられる、様々な機能を装備してあるので、そのために、講義の中で、教材、提出物等をウェブ上で扱い、講義資料も無駄な紙媒体で利用

することなく、コミュニケーションを進めていくことが可能なシステムである。

講義で何よりも大切なことは、今、話をしているのが、教師であれ、学生であれ、その話を聞くことである。

日本の国語教育が、明治以降、「書くこと」、「読むこと」に比重を重く置き、「聞くこと」、「話すこと」をないがしろにしてきたことは、すでに様々に指摘されているにもかかわらず、現在も中等教育の現場では、「ノートを取る事」が講義の中における最も大切なことであり、実際に教育現場では「ノートを取る事」が「個人評価」にも密接につながっている局面もあると聞く。

大学の教育現場でも、話している教師である私を見ないで、私の背後の黒板を学生の目が動くのを常に感じる。第一、教師がすでに黒板を書き終わって学生の方を向き直り話しているのに、なぜまだノートを書いているのか、「書くのが遅い！」としか言いようがない。だいたい黒板にチョークで字を書くのは結構力があるのである。しかも大きな字を書かなければいけない、学生がノートに鉛筆ですらすら書くぐらい、いかほど時間がかかるものか……と毒づきたくもなる。

つまりは、ノートを書くことだけが講義を聴く姿勢だというすり込みがいつの間にか出来ている。これは恐るべき事である。

ノートというのは、講義を聴いているときに、教師のいうことを、自分の頭のフィルターに通したときに「初耳」、「違うだろう」、「もっといいこと思いついた」、「後で質問しよう」、などというリアクションの表れであるはずなのに、そのことがすっかり忘れられている。横目でちらちら喋っている教師をみながら、教師のしゃべりをBGMのごとく聞きながら、黒板に書かれた文字をノートにとるなど、未熟者が10年早いと言うべきだ。

世間話を喫茶店でしていても、携帯メールをチェックしながらでは、話についていけないのだから、まして、教師の話をよく事(黒板をノートになにも考えずに書き写す行為)をしながらでは、頭に入るわけがないのである。

それではどうしたらいいのか。「ノートを取らなくても安心」という気持ちにさせておくのがもっとも良いのではないか。

「システム」の講義ページには、「テキスト資料」と、ワード文書やエクセル資料、その他、画像などをしまっておく「ファイル資料」というボックスがあり、つねにそこに講義の概要や必要な資料が入っているから、必要な時は、「システム」の講義ページにアクセスすれば良いので、講義時間中にせっせとノートする必要はない。じっくり私の話を聞いて頭の中で考えて、自分の意見にまとめ上げて欲しいと思うのである。

そもそも「システム」を用いて講義をする場合は、パソコン教室で全員がパソコンの前に坐れば、全員が講義ページを見ながら講義できるし、一人1台パソコンが無いときは、教師のパソコンの講義ページをプロジェクタで映し出せば良いのだから、そもそも黒板など書く必要もないのである。

(2) サポート体制

先に述べたように、現行のカリキュラム上の講義時間では、なかなか思うような濃厚な教育指導は出来ないようになっている。このような現状において、講義時間以外の時間を、無駄なく、かつ無理なく使い、教師と、仲間とのさまざまなコミュニケーションを通じて、「読む」「書く」という言語行為の回数を重ねることが必要になってくる。

「システム」の「講義ページ」の交流ページで、直接教師や、受講生仲間に自分の意見

を発信できるし、教師は、その学生の質問を他の受講生に教育効果を考えて上で披露する事が出来る。そのような機能があることにより、講義ページで提出されたレポートや、意見を「講義資料」「教材ページ」等に移し、次の講義の折の新たな教材とすることも出来る。これらの事が、コピー、印刷、大量の紙、教室での配布……といった、従来の手間暇をすべてパソコンの手元操作でやってのけることが出来るのは、情報の時代のお陰である。

(3) 自己主張

当たり前のことであるが、自分が語ったり書いたりするとき、どのような「言葉」を選ぶかはとても大切である。言葉にこだわり生きて行く姿勢は、自分自身の心と自我を大切にすることで、人生観を映すものであるし、折につけ自己主張をし続けなければ、結局は体制に押し流されるし、一度自己主張をしそこなうと、それは、軌道修正が難しいと思う。人生観とは無縁な話であるが、私は、かつて大学へ通勤するのに名鉄本線で岐阜まで行っていた。名古屋駅のホームで待つと、「犬山周り岐阜行き」という電車が来る。掲示板を注意してみれば分かるのだが、電車の赤い色は同じであるし、岐阜という文字がみえるので、あるときぼっとして乗り間違え、それは名古屋駅を出てしばらく走り、枇杷島を通り過ぎた頃大きく右へカーブしていき、あれあれと知っているうちにいつもの線路が見えながら遠ざかっていった。途中の見知らぬ駅で降り、バスで名鉄本線の最寄り駅まで走ったが、その距離や時間がどれくらい長く感じたことか。一度自己主張をしないでずっと、自分の意志と関わらない方向へどんどん運ばれていく。

そのようにならないためには、「自分を語る」、「書く」時に、自分の事や自分の意志を

相手に伝えたい、心の中まで相手にわかってもらいたいという「自己主張」「自己の気持ち」を的確に表現する言葉を獲得することが必要である。それは、何度も書く訓練をすることにより身に付ける外はない。講義では、自分の身の回り、自分の気持ちを素直に表現するためのプログラムとして、自分の内面をいかに豊かに表現できるかというテーマで「履歴書」の肉付けを行った。

「自己表現」には、他の担当者が「履歴書」の書き方を教授する時間がある。学生達が社会と関わる最初の入り口で「書く」必要がある大切な書類である。

「履歴書」とは、その個人を特定する情報を相手に伝える「もの」であるはずが、違う見方をすると、逆にその個人の個性であり、最も人間らしく、感情がこもり、血が通った一面を見事に覆い隠す「代物」でもあると私は考えている。「言葉多いと氏素性が現れる」と言われるが、社会に通用するのは、上手に氏素性を必要以上に見せない「履歴書」であるのかもしれない。それが賢い世渡りであることも否めない。

しかし、名前、住所、経歴、家族関係、どの項目をとっても、「世界であなたという人物はたった一人」という尊厳さを著す「もの」ではない、つまりは記号の羅列であって、同姓同名もいるだろう、同じ町名にはもっとたくさんの方が住んでいるし、岐阜女子大学を卒業した学生はたくさん居る……という具合に。

そこで、「履歴書」の無味乾燥な言葉を、自分独自の自己表現で豊かに補い、「心の履歴書」と講義では呼称した)を書くことから始めた。言葉が貧困であると、自分の気持ちを正確に相手に伝えたいという熱意もなくなるような気がする。

例として私の「心の履歴書」を巻末に示す。

(資料1)これを学生にサンプルとして、本来の「履歴書」項目(太字)をどのような自分自身に関わる情報で豊かに表現できるかを考えた。

(4) 自己の相対化

(3)でそれぞれ書き込んだ「心の履歴書」を公開する。同じ環境、同じ年齢の仲間の感じていること、考えていることを知ると同時に、他者の「心の履歴書」と自分のそれとを比較し、考え方、感じ方、表現の違いなど、さまざまな観点から自己の相対化を試みる。

本来、このようなプログラムは少人数で、「話す」「語る」という行為で他者の前で発表し「聞く」、そして、「意見交換」できる場が本来の姿である。しかし、日本の教育はそのような豊かな環境に置かれてはいない。

2004年9月14日に経済協力開発機構(OECD,本部パリ)から、加盟30カ国の教育についての報告書が発表されたが、驚くことに、小中学校の1クラスの平均人数は、日本は韓国について、2番目に多く、不名誉な銀メダルで、その他、対GDP比の教育への公的支出は加盟国で最低で、日本の教育条件の貧困さが明らかにされた。

そんな日本で、自由に意見がいえるような中等教育がなされてきたはずもなく、そういう中をくぐって大学に来た学生が突然、大学の教室では元気になって、ディスカッションをするなど、まず望めないことである。

そのためにも、「システム」は役に立ってくれる。

「心の履歴書」は課題として指定した期日までに、全員のものが、「システム」の講義ページの「心の履歴書」ボックスに登録された。あとは、自由に読みたい友人の履歴書をクリックすれば良いだけである。

むかし、学生から提出されたレポートを読

んで、とても感動することは多々あった、その時は、是非他の学生に読ませて、感動を共有したいとしみじみ思うのだが、それを学生分コピーをしたり、あるいは回覧したりという物理的な方法は困難で、さまざまな理由で実現が難しかった。

長い間夢見たことが、この「システム」を開発することで、実現できたことを私は本当に嬉しく思った。

そして、学生に、質問や、共感や、意見や、反論などを、書き込む方法を教え、友人の「心の履歴書」を読み、自己の相対化をはかり、「相手を意識して書く」ことを学ぶことにした。

(5) 言葉と社会

次に、自己を表現するときに、現在まで生きてきた間に、身に付けてきた言葉や、表現のみで著そうとしたのでは、不十分であることを教え、これからも、たくさんの言葉(表現)を頭の中のユーザー辞書にため込んでおく必要が有ると同時に、言葉の歴史性・社会性を正しく認識することが次に大切であること教えていきたいと思う。

最近の学生は、平気で、人前で「昼ご飯を食う」と言うのを聞く。「食う」という動詞があるから、使えばいい、というものではない。その言葉が社会の中でどのようなポジションをもっているのかを、感じ取る必要がある。

よく、「ご主人はお元気ですか」などと平気で聞く人がいるが、私は自分の夫を、「主人」とは言わない。同時に自分の妻を「女房」と人前でいう男性には「心を置く(古典語で用心する、距離を置くという意味)ことにしている。最初にその話を学生にすると大半の学生が始めて聞いたようなビックリした顔をする。「女房」という言葉と「主人」という

言葉の歴史性を教えて、日常にも考えずに言葉を使う事の危うさを教えるべきだと考える。最近はあまり使わなくなったが、「インスタントカメラ」のことを、一時「バカチョン」といったことも、差別語であると教えなければ分からない。正確な知識を身に付けて後に、思想は自分で選択し、自分が責任を持つのである。

教師は、各人の思想信条まで踏み込むことは出来ないが、正確な知識を伝達する義務はある。正確な知識を伝達することは、しかし、教師の物の見方、考え方がかなり色濃く投影せざるを得ない。それこそ、「日本語」を教える教師は覚悟して自己主張するしかないと腹をくくる。

そのように、言葉にまつわる歴史性や、社会性を正確に理解して、多くの言葉を自分の頭のなかのユーザー辞書にため込むためには、豊かな表現、知的な内容を有した、書物やそれに類する物、映画、演劇、ドラマ、あらゆるメディアを出来る限り多く摂取して言葉を身に付けるようにすることが必要である。

そして、時に応じて、場合にふさわしい言葉を使い分け、自分をとりまく言語生活を豊かにしておく必要を語っていかねばならないと考える。

(6) 変遷する言語

現代は、さまざまなメディアでも若者コトバがあふれ、一方で明治時代の小説の言語などはとうに理解できない学生達が増えている。「そんなことで社会にでられるのか」と学生達に問いかけたい局面につねに出くわす。

家の中で、核家族といえども、親子の年の差は30年前後あり、大学の教育現場も、定年直前の教員と学生の年齢は、30年を超える、

学生が社会にでて、会社の上司とは、30年、学生がキャリアをつづけ、若い部下を持つようになる、年々彼らとの年の差は離れる。

大学の4年生が、新入生の言うことや、やることを見て、「最近の若い子は何を考えているのか」と嘆く、そんな笑えない場面も現出するのが、最近の大学の現場でもある。

つまりは、今後生きていくためには、自分を中心に30年上の世代と、30年若い世代と、約50年以上の時代の巾を上手く渡って行かなければならない。

そこで、今年度は、この目的のためには、次のようなプログラムを考えた。

今回の「自己表現」の講義では、「読む」「書く」の外に、「聞く」ことをも重視した。先に述べた理由で「話す」ことは、現在までの教育現場では物理的に不可能で、「システム」の書き込みで代替したのである。

さて、「聞く」ことの大切さ、「聞き」ながら、自分の頭のなかのユーザー辞書をフル回転し、分からない言葉、表現をどう自分の中で処理していくかという問題を提起した。

まず、「聞く」ことに慣れるため、そして、知識が無いと「聞いて笑うこと」も出来ないことを知るために、柳家権太楼の「落語『幽霊の辻』の「枕」を聞かせた。これは小佐田定雄作の新作落語で故桂枝雀のみが演じていたが、権太楼は、とてもユニークな彼独自の「枕」を用い、落語が如何に知的な教養を必要とするものかを熱く語っている。参考に文字化したものを以下にあげておく。

よろしくおつきあいのほどを願っておこうというわけですがね、私のガクユウでね、ガクユウといっても学校の友達じゃないですよ。楽屋の友達ですよ、ラブ平てのが居るんですよ、三平さんのお弟子さんでしてね、こいつが若いときに二つ目になりたてのころで

すよ、みんなの前で大きな声で、「ぼくたちはね、これから出世しますよ、それはもうね、かちくの勢いですよ。」「なんだ、おめえそのかちくのいきおいてのは、」「エーだからさ、牛とか馬とかさそういうのばパーと走る様、」本読まねえもんですからね、音感だけでおぼえちゃう、みんなで酒のんでてね、うん、ラブ平くんをいじりながらね、「いいね、ラブちゃんはね、色男だからね、女にもてるだろ、たまんない、女がほっとかないだろう、くやしいね、ほんとうに、なんかご馳走しろよ、ご馳走しろ、色男!」「また、みんなでぼくのことを魚のえさにして、」「さけのさかなってんだ、ばかやろ」「おめえはプランクトンか」まあ、でも本当にね、寄席というか、落語をきいて笑おうと言ってくださるのはね、うれしいものでございますよ。まあ、若い人がねあんまり、寄席だとかね、落語だなんてに興味を示しませんでね、年寄りが、多いんですよ、(中略)じゃあ子どもがわかるかってね、この子どもがまた無理なのですね、小学校のね高学年ぐらいになれば、落語もわかりますけどね、ね、こんなのはわかんないですよ、ね、日本語もわかんないですよ、こんなわかるわけじゃないですよ、落語なんて言う物は有る程度の知的レベルが必要ですよ。ね、要するに語り手と、聞き手がですね、同じイマジネーション、空想力、想像力、それを求めるわけですよ、(以下略)

ここに、示されるように、「有る程度の知的レベル」が落語に必要であることを理解してもらった。実際にこの権太楼の「枕」は、省略したところも含めて、学生達のかなりの共感を呼び、笑いを引き起こすのに十分な素材であった。

次に「落語」を聞きながら、その意味を正確に理解できているかを、「ひらがな」を漢

字に転換させることで、その理解の度合いを測ろうと考えた。

今回は、柳亭痴楽の『ラブレター』を素材に用いた。「枕」のひらがな文を提示する。これは「システム」に教材として入力してある「ひらがな書き本文」を、スクリーンに映し、「落語」を聞きながら見るという講義形態をとっている。

「正しく聞けたか」、「正しく文脈に沿って理解ができたか」、「面白く鑑賞できたか」という観点から、学生の「漢字仮名交じり文」を提出させた物をあらかじめチェックして、次の講義で効果的に学生に利用できるデータを集めておく。学生にとっても、自分たちと同じ仲間の理解によって、作られた「漢字仮名交じり文」を、自分の物と比較して受け止めることが出来るのも、「システム」利用の利点である。

以下、ひらがな文の「ラブレター」の枕を示す。

エー、おわらいのじかんでございまして、わらうかどにはらっきーかむかむなんてこともうしますので、どうぞひとつおおいにおわらいください。

まずさいしょに、ささやかなわたしのこいものがたりから、ちょっときいていただきたいとおもいます。

じゅうしちはるがおとずれて、じゅうはちこいをしりそめる、あのことろめざめてそのまんま、いまだにかのじょもできないで、めざめっぱなしではやみそじ。あーそれだからそれだから、むこうよこちょうのおいなりさんのさいせんひろってがんかけました。われときてあそべやかれしのないおとめ。ねがいかなくなってはずかしうれし、すすきすすきよちらくさん、あなだじゃなけりゃならないの、てなことまだまだいわないけれど、ぼくとかの

じょはかたよせあって、なかよくみにいくえいがかん、ごじらともすらのにほんだて、これみたあとならばくだってにまいめきどりのいいおとこ、つきがとつてもあおいからとおまわりしてくたびれてはれてうれしやおんせんまーく、ぼくのはーとはもえてきた、はーとぼつぼともえてきた、あーそれなのにそれなのに、あのこしーちょうかまとむすめ、おいろけありそでなさそうなせくしーむーどのちらりずむ、あもーれあもーれいってるくせに、おかねのないひととおしやせぬ、いきはよいよいかえりはこわい、しょうとくたいしとなきわかれ、おけらけらけらせらせら、ちらくつづりかたきょうしつ。

この「ひらがな文」を課題として、各自「漢字仮名交じり文」に変えること。その折に、当然辞書等を用いて、不明の言葉の意味を調べてもらった。上記の「ひらがな文」の下線部の言葉を、グループ分けして分配してその言葉の出典や、意味を提出させた。

提出後、教師がチェックして、講義で披露できる学生のサンプルを特定して、「システム」で全員に見せる。

この、「ラブレター」は、学生達にとっては30年も年上の世代の言語を突きつけられ、面くらい、不快な思いさえ感じているかもしれない。むろん、先の下線部の言葉の中には、マニアックな言語表現もある、「おいろけありそでなさそう」などという流行歌の類まで覚えることもなさそうな表現もある。しかし、それらの言語表現の多くは、⁽⁵⁾で述べたように、歴史性、社会性を学び取る大切なキーワードになっていくと思うのである。

それでは、明らかに若い人たちに向かって発信されるメディアの中の言葉は、若い学生の世代が全てわかっているというわけでもないことを、今回は次の例を挙げて説明をして

いくことにした。

次は、柴咲コウの『泪月 (oboro)』(作詞
前田たかひろ 作曲 松本良善)
という歌の歌詞である。

暁も待てぬ想い現には逢うよしもなく
長き夜に身悶えしはまた。。。恋しや
ぬばたまのこの黒髪 月夜に放ち絆となれ
み空行く月の光 さあ、絆となれ
あやし夢いざなう永久のほとり
この見引き裂かれし恋は感うばかり。。。嗚呼
おろかに生きてました でもしあわせでした
恋は生きいそぐもの
かくせぬ想いです 月がにじんでいます
眠れぬ泪月
悲しげにたなびく雲 星離り行き月を離れ
天地の別れし時ゆ 幾たびの運命
恋しければ袖ふる妹のごとく
(以下省略)

この歌は、全体として何を主張したいのか
私には、よく分からないし、『泪月』と表記
して、果たして、「おぼろ」と読めるのか、そ
れもとりあえずは私の頭のユーザー辞書には
無いけれど、若い世代の人には、全体の雰囲気
でこのような歌は体感するものなのかもしれ
ない、と思う。

しかし、文字を追っていればわかるように、
歌詞にちりばめられた、一つ一つの言葉はや
けに古典語の匂いがするし、きわめて和歌的、
それも万葉的な言葉使いがされていて、果た
して、これを聞いている若い世代の人は一つ
一つの言葉の意味を分かって聞いているのだ
ろうか？ あるいは、これも『ラブレター』

の枕と同じように、『ひらがな文』を提示し
て、音楽を聴き、『漢字仮名交じり文』に変
換する時には、同じように、辞書を使い苦労
して理解することになるのであろう。

つまり、『落語』や『流行歌』一つ『聞く』
姿勢も、大学で専門的な講義を『聞く』姿勢
もなんら、変わりなく『言葉』にこだわり、
自分の理解度につねに気を配り、理解できな
い事は真摯に受け止め、それを克服すること
に努力をすることが出来る自分を作り上げる
一步を、この『自己表現』のプログラムから
踏み出したいと思うのである。

さいごに

紙面の都合で、実際の講義の実践における、
さまざまな教育の成果に関して述べることが
出来なくなってしまった。このプログラムを
実行したことによる、学生の具体的な反応や、
評価や、反省点などは、改めて報告をしたい。
また、今年度はプログラムだけ先行し、実際
には、3時間という担当時間では時間不足で
もあった。

このプログラムは、半期講義でも十分利用
できる内容で作上げた物なので、その点に
おいても、今一層の改良を加えて改めて実施
したいと考えている。

巻末資料

- 1) 履歴書
- 2) システム『講義ページ』トップ
- 3) システム『講義ページ』『こころの履歴書』
ボックスの提出リスト
- 4) システム レポート『ラブレター』の枕
「漢字仮名交じり文」(学生提出分)



1) 履歴書

個人ページへ戻る	講義コード 1C	自己表現Ⅰ-火		講義方法	講義担当者
講義リストページへ戻る	講義期間	2004.4~2004.9 [前期のみ]		講義 単位数(1)	塩田公子 渡少納言 繁式郎
講義概要	講義対象	＜観光＞＜文化＞＜書法＞＜家政＞＜音楽＞＜住居＞		1年 [必修]	
メニュー項目変更	お父さんお母さん	志士上村社	ファイブ社社	講義資料	出席簿一覧
お父さんお母さん データベース	あなたの心の履歴書	講義データベース			

お知らせ		レポート出席																									
<p>以下が、準卒業生「ラブレター」の続 わらいのじかんでございまして、わらうかどにはらっきーかむ かむなんでこともうしますので、どうぞひとつおおいにおわら いください。</p> <p>まずさいしょに、ささやかなわたしのこいものがたりから、 ちよっと書いていただきたいとおもいます。 じやうじちばるがあとずれた、じやうじちばるこい多し、りまめる</p>		<table border="1"> <thead> <tr> <th>開示日</th> <th>提出期間</th> <th>課題レポート名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2004/06/24</td> <td>2004/07/15</td> <td>課題二つ</td> </tr> <tr> <td>2004/06/18</td> <td>2004/06/24</td> <td>あなたの心の履歴書</td> </tr> </tbody> </table>		開示日	提出期間	課題レポート名	2004/06/24	2004/07/15	課題二つ	2004/06/18	2004/06/24	あなたの心の履歴書															
開示日	提出期間	課題レポート名																									
2004/06/24	2004/07/15	課題二つ																									
2004/06/18	2004/06/24	あなたの心の履歴書																									
講義の出席		提出レポートリスト																									
<p>2004/06/28 15:28 【横山妃子】 すみません、レポートを送ったんですけど、題名が家なのを 送ってしまったのもう一個誤りました。</p> <p>2004/06/23 14:22 【三輪祥子】 すみませんm(__)m、ここに書きます。えっと、このページ の「自己表現・火」って書いてある下の学号帯の名のところ です。一応のとこだけ違ってることが無いはずよ。前 回は家な帯に書いてしましましてすみませんでした。先生の 目は厳しくて好きです。それと自分を表現するのは難しいです 。次で終わってしまうかと思うとちょっと残念です。</p>		<table border="1"> <thead> <tr> <th>提出日</th> <th>提出者名</th> <th>レポート名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>07/09</td> <td>辻美也子</td> <td>【自主提出】準卒業生の「ラブレター」</td> </tr> <tr> <td>07/05</td> <td>飯田直美</td> <td>課題二つ</td> </tr> <tr> <td>07/04</td> <td>中島由紀子</td> <td>出席簿 課題二つ</td> </tr> <tr> <td>07/04</td> <td>中島由紀子</td> <td>課題二つ</td> </tr> <tr> <td>07/02</td> <td>渡邊菜穂子</td> <td>【自主提出】課題二つ</td> </tr> <tr> <td>07/02</td> <td>日比野文美</td> <td>課題二つ</td> </tr> <tr> <td>07/02</td> <td>宮島千枝</td> <td>課題二つ</td> </tr> </tbody> </table>		提出日	提出者名	レポート名	07/09	辻美也子	【自主提出】準卒業生の「ラブレター」	07/05	飯田直美	課題二つ	07/04	中島由紀子	出席簿 課題二つ	07/04	中島由紀子	課題二つ	07/02	渡邊菜穂子	【自主提出】課題二つ	07/02	日比野文美	課題二つ	07/02	宮島千枝	課題二つ
提出日	提出者名	レポート名																									
07/09	辻美也子	【自主提出】準卒業生の「ラブレター」																									
07/05	飯田直美	課題二つ																									
07/04	中島由紀子	出席簿 課題二つ																									
07/04	中島由紀子	課題二つ																									
07/02	渡邊菜穂子	【自主提出】課題二つ																									
07/02	日比野文美	課題二つ																									
07/02	宮島千枝	課題二つ																									

2) システム『講義ページ』トップ

作成日	資料名	作成者
2004/08/05 23:29	川井彩	可児梨月
2004/07/26 12:42	藤原 真衣	藤原真衣
2004/07/26 11:28	北島雅絵	北島雅絵
2004/07/24 13:27	上西道 香里よ	金森清
2004/08/02 11:49	安藤理恵	北野真衣
2004/07/26 20:34	江口由希子	藤原真衣
2004/08/04 00:10	可児 梨月	川井彩
2004/08/04 18:51	澤村梨花子	荒山藤子
2004/08/05 23:45	藤原真衣	可児梨月
2004/08/05 15:09	下里まゆみ	澤村真希
2004/08/01 10:39	角花小百合	片岡久美子
2004/07/29 20:59	藤原 真衣	杉浦香織
2004/07/26 20:16	小川 真由美	藤原真衣
2004/08/02 12:00	赤沼麻志子	北野真衣
2004/07/30 14:37	☆☆☆金原 達子☆☆	小見山真奈
2004/08/02 12:37	大木比佐子	大塚有希子
2004/07/26 10:57	☆☆☆小見山 真奈☆☆	藤原真衣
2004/07/24 13:50	藤原 紗代	金森清
2004/08/05 23:52	岩田 真由美	可児梨月
2004/08/03 11:33	駒地香子	岡田智世

3) 「こころの履歴書」

< 【自主提出】柳亭痴楽「ラブレター」 / 参照 >

学籍番号 : 2004114074 氏名 : 種石有希子

美しい時期でございます。笑う門にはラッキーが来るといってこと申します。どうぞひとつ大いにお笑い下さい。

まず最初に、ささやかな私の恋物語から、ちょっと聞いていただきたいと思えます。

十七巻が訪れて、十八巻を語り始める。あの頃目覚めてそのまんま、未だ彼女も出来なくて、月見めっけばなしで早退。あーそれだからそれだから、向こう横下のお稲荷さんの前庭に落ちてました。私と来て遊べや彼氏のない乙女。面白いって恥ずかし顔し、好き好き顔さん、あなだじゃなければならぬの、てな事まだ言わないうけれど、僕と彼女は順番を合せて、仲良く見に行く映画館、ゴジラとモスラの二本立て、これ見ただけなら僕だって二枚目気取りのいい男、月がとっても高いから満月してくだびれて帰って来や温泉デート。僕のハートは燃えてきた。ハートぽっぽと燃えてきた。あーそれなのにそれなのに、あの平に涙かまると顔、お色気ありきでなまそうなセクシーモードのちらリズム、アモーレアモーレ言ってるくせに、お金のない人達じゃせぬ。行きはよいよい帰りは怖い、聖徳太子と泣き別れ、種枯れかけらケセラセラ、商業つづり片断。

4) 学生のレポート